

NEWS LETTER

新会長よりご挨拶



本間昭子 会長

新型コロナ感染の影響により、皆様、如何お過ごしでしょうか。医療現場の看護職の皆様におかれましては、非常に重要な役割を果たされ、尊敬の念を抱くと共に、感謝申し上げます。その中であって、小児看護に携わる皆様は、制限された療養環境の中で生活する子どもと家族のために、奮闘されていることと思います。本当に、「看護職って素晴らしい。看護職がいるから安心。」と思う毎日です。

さて、私は松井由美子先生から、第7代会長を引き継ぎました新潟青陵大学本間昭子と申します。2004年7月に発足したこの本研究会は、今年で17年目になります。

発足当初から、病気や障がいのある子どもと家族の声を聴き、看護実践ならびに教育・研究に寄与する活動を続けてきました。研究会やニュースレターの発行を通じて、その時々小児看護に期待される役割を果たせるよう、テーマを取り上げてまいりました。最近、病気の子どものきょうだいに對する支援や、医療的ケアの必要な子どもの看護について検討してきましたので、さらに進めていきたいと考えております。

研究会は、大学の教員と臨床の看護師がタッグを組んで、参加者の代弁者になったつもりで企画を練り上げます。役員の願いを具体化した研究会に参加した私の経験では、専門家ならではの「目からうろこ！」のこともあれば、看護を受ける立場の子どもや家族からのご意見に、「もう少し、どうにかできたのではないかと、振り返る機会でありました。本当に残念ですが、コロナ感染により今年度の研究会は中止となりました。来年度は、是非実現できることを願って、準備させていただきます。

今後とも、会員はもとより、小児看護に携わる看護職並びに他職種の専門家の皆様の協力を得ながら運営をしてまいりますので、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新潟小児看護研究会第7代会長 本間昭子 (新潟青陵大学看護学部)

第21回新潟小児看護研究会を開催しました 令和元年11月9日(土) 於：新潟大学医学部保健学科

今回は、本会の会員を中心に、小児看護に関する最新の話題についての情報共有の場や臨床で直面している課題についての意見交換を行いました。

具体的には、話題提供と参加者交流の2部構成とし、相互交流の機会が持てるように企画しました。話題提供では、国内外の小児看護に関する知識や情報、研究を紹介し、意見交換を行う場にしました。参加者交流会では、「日頃子どもやご家族の看護で気になっていること」「学会や研修会で学んだこと」など小児看護の臨床現場や小児看護学の教育の現状等について自由に話し合い、会員の交流を目的に企画しました。このような交流が種々のネットワークにつながり、それぞれの現場でのより良い看護への小さな一歩につながることを期待しています。

企画担当者 大久保明子・田中美央

2019 ICN(国際看護師協会)大会 in Singaporeに参加して
坪川 麻樹子氏 新潟医療福祉大学 講師



坪川麻樹子 氏

ICNは世界最大規模の看護学会で、2019年は創立120年周年の記念大会でした。130カ国から約4,000人の看護師が参加し、6日間にわたり開催されました。大会の1年前から演題応募が行われ、4,600以上の応募のうち、口演599題、ポスター発表1,547題、eポスター発表483題、シンポジウム3題がありました。特に興味深かったのは、口演がYoutubeで配信されていたこと、eポスターでは、専用タブレットで閲覧可能で、興味あるポスターは自身のメールに送付可能でした。登録されたデータを参加者が自由に閲覧できる点など、新たな手法・形式での発表が興味深かったです。

さらに、eポスターでは、自国の文化の紹介スライドもある他、2か国語での表示、強調点やポイントが印象的に表示されるなど、工夫されており、国際色豊かな内容でした。演題登録では、カテゴリーに見合ったテーマに応募することも重要なポイントのようです。



「夜間小児救急外来受診に至る要因の検討」について
佐藤 由紀子氏 新潟大学大学院保健学研究科

近年の小児救急医療では、軽症や頻回受診が現場を逼迫し問題になっています。子育て中の保護者を医療面でサポートしていくために、夜間の小児救急外来に受診する保護者の要因はどのようなことなのかを検討しています。新潟県内の乳幼児の保護者へのWebアンケートを実施したところ、わかったことは、小児救急外来への受診は「都市部に居住」「救急車利用の経験者」「中高卒の教育歴」と関連があるということです。

子どもの急な病気やけがで保護者の不安が少なく済むような対策を、ぜひ一緒に考えていただけませんか？



佐藤 由紀子氏

～～ 会場から講師の先生方へ質問 ～～

Q：今回の発表すごく日々のお母さんの様子を反映してすごく勉強になりました。感想ですが、救急医療に受診しても次の日には保育園に来てしまう。本当に地域での保護者への教育がとても必要だと日々感じてます。最近のお母さんは、「受診しました。薬飲めば大丈夫と言われました」終わりみたいな感じが多く、薬も出されたら1週間子どもの状態が変わっても飲み続け、途中受診はしない状況です。夜間救急は予約がなくても行けると考えている所がある。そこをどうしたらよいのか、皆さんからお話を聞きたいという思いもあって参加しました。

A：今救急の医療機関に現在勤務していて、軽症受診が多いと感じています。文献では観察ができていないお母さんほど夜間の救急受診をする報告がありまして、これからどうなるか怖いという思いもあって受診している所があります。一番指導効果があるのは受診をした時だと言われていて、医療現場での指導と地域保育園や子育て支援センターなどと包括的支援できるようになるといいなと考えています。

～～ 会場から参加者へ質問 ～～

Q:会場の皆さんに質問です。例えば、熱性けいれんで救急車で受診して翌日帰宅…そのようなときに、自分はちゃんと指導していたかな？と思うと指導が浅かった感じで反省点もありつつなんです。現在例えば救急車搬送されてきて診察して返す時の指導状況について教えて頂けませんか。

A:病棟で働いていた時（現在は外来）熱性けいれんの初回ですと、指導用紙を準備してお渡ししていました。なぜかという、熱があがった時にまず熱を下げようと、けいれん予防の坐薬の前に解熱剤を入れて、熱さえ下がれば大丈夫っていう勘違いが多かったこと。それを防止するために、座薬を入れる順番、けいれんが起きたときの観察、受診のタイミングについて用紙を作成した。不安があるときに口頭で説明しても、きっとお母さんの印象にはきっと残らないので、もしもけいれんが起きたら確認してねと指導して帰しました。

A:2次輪番の制度がありますので、熱性けいれんで運ばれてくる1歳前後の小さなお子さんが受診する。お恥ずかしながら、まだマニュアル的なところの説明用紙がない。そのため、次に起こった時説明は、個々の看護師の力量に任されているところがある。医師の診療はそれぞれですが、初回の熱性けいれんの患者さんに関しては、だいたい経過観察入院にしている。今日聞かせて頂いて、救急医療の現場という所で指導するには説明用紙が必要なんだなって勉強させていただきました。

参加者交流会について

情報提供いただいた佐藤先生の報告から、新潟県内各地域の小児救急医療やクリニックの現状や、自施設での熱性けいれん事例への対応方法など、具体的な内容について白熱した意見交換が行われました。特に、対象となる子どもと家族へのアプローチと、小児医療の体制やあり方の課題を共有しました。医師不足や二次医療圏の状況を踏まえ、新潟県「小児医療あり方検討会（本県における小児医療体制のあり方について、幅広い視点で議論するとともに、本県の実情に即した小児専門医療施設の設置について検討を行うための会）」などとの情報共有の重要性も話題として挙げられました。



検討会の様子

参加者の声

「ICN 大会 in Singaporeに参加して」について

世界の看護の動向やエントリー発表する留意点が学びになりました！

国際学会にチャレンジする前向きな姿勢に刺激をいただきました。まずは参加してみることが大事だと思いました

「夜間小児救急外来受診に至る要因の検討」について

日本の子供を取り囲む状況について考える機会となりました。養育者の力を支援する看護について今後も具体的に検討する必要性についても再認識できました

普段臨床の場で感じている「なんとなく、こうかな」という予想と実際の分析結果が結びついてとても勉強になりました

「小児病棟で行う災害の備え～ぼく(わたし)こうやってにげるよ～」

木下 笑香さん 地方独立行政法人 広島市立病院機構
広島市立広島市民病院 小児救急看護認定看護師

私の勤務する小児科病棟では、各勤務開始時に病棟防災マップを用いたペーパーシミュレーションを行っています。避難時に酸素の必要な子どもが何人もいて、携帯用酸素の数は足りるか、担送や車いす、抱っこなどの逃げ方のイメージをします。

人工呼吸器を装着した子どもも入院しており、今回は付き添い者のいないオープンフロアの人工呼吸器を装着している子どもや心臓術後の子どもたちの防災訓練の場面についてご紹介します。

災害時の現場がパニックになることは想像に難しくなく、人工呼吸器を装着した子どもたちが避難するとなると…。実際の災害時には、マンパワーに対して可能な限り子どもたちを一度に避難させなければならぬため、普段のペーパーシミュレーションでは、一つのベッドに数人まとめて避難する想定をしていました。保護者の方に承諾を得て、安全に訓練ができるよう計画・実施しました。

準備段階では、まず一人一人の子どもの病態と現状を把握し、主治医にBVMを使用するのか、在宅用呼吸器に切り替えて移送する方が安全かなどの確認、認識の統一を行いました。その時発案したものが「ぼく(わたし)こうやってにげるよ！」シートです。子どもたちそれぞれがベッドを離れる時や移送時に必要な物品や機材、移動の仕方などが提示してあります。それに沿って準備物品を揃え、機材の取り扱いや移動する順番、装着する順番をイメージしました。

そして防災訓練の日、避難誘導指示の発令後、リーダーの指示に従い人員確保、酸素ポンベの回収、移動開始です。実際は、1台のベッドに在宅用呼吸器などが乗ると、子どもが3人以上乗れるスペースはなく、スタッフは困惑。子どもが泣き出してしまう場面もあり、実際に訓練を行ってみて分かることもありました。リーダーやスタッフみんなで声をかけ合い、移動順などを軌道修正しながら全員の子どもたちをオープンフロアから安全な場所に避難することが出来ました。6人全員が避難して点呼するまで17分の時間を要しました。今回の訓練を通して、①リーダーの的確な指示と「やります!」「やりました!」の声出しは必須、②人手が多い場合は移乗の手間やリスクを考え1患者1ベッドor抱っこでの移送が安全かつスムーズ。夜間は1ベッドに2人まで収容、③移送中も顔色やモニター等、子どもの観察を怠らないこと、④ベッド内の整理整頓やライン類の整理、必要物品の準備を日常化すること、などが明確になりました。

「小児病棟で行う災害の備え」。それはいざというときのための準備やイメージトレーニング、実際の訓練を「日常化しておくこと」、対岸の火事ではなく、いつ自分たちの身に起こるかわからないということを意識しておくことが大切です。今後も病棟全体で災害に対する意識付けや備えなどを万全にしておきたいと思います。

第22回 新潟小児看護研究会について

今年度予定をしておりました研究会ですが、新型コロナウイルス感染拡大防止のために開催延期とさせていただきます。

今後につきましては、状況を見まして、2021年度に再度、同様の企画をしたいと考えております。その際には多くの皆様のご参加をお待ちしております。新型コロナウイルス感染拡大が1日でも早く収束することを願っております。



会員募集

新潟小児看護研究会では、入会希望の方をお待ちしています♪入会のご希望の方は、事務局までお問合せください。

新潟小児看護研究会事務局
☎951-8121 新潟市中央区水道町1丁目5939
新潟青陵大学 和田由紀子、桐原更織
e-mail: info.niigatachild@gmail.com

編集後記

COVID-19の感染が拡大し、ご所属の医療機関では感染者への対応や対策に、お忙しくお過ごしのことと思います。来年は、研究会で皆様と、情報交換したいと思います。みんなで頑張りましょう!

編集担当:

田中 美央 (新潟大学大学院保健学研究科)

前田恵美子 (新潟市民病院)

佐藤由紀子 (新潟大学医学部保健学科)